弘前大学教育学部紀要　第98号：45～58（2007年10月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 98：45～58（Oct. 2007）

近代ドイツのトゥルネンにみる「身体」と「権力」

Über Körper und Macht im Turnen des modernen Deutschlands

釜　崎　　太*
Futoshi KAMASAKI*

Zusammenfassung

Der Zweck dieser Untersuchung als einer wesentlichen Forschung der deutschen Sporterziehung ist es, den Entwicklungsprozeß des deutschen Turnens im Kontext des modernen Deutschland zu überprüfen.

“Deutsche Leibeserziehung” wird heutzutage “Sporterziehung” genannt. Die Genealogie der Sporterziehung geht auf das deutsche Turnen im 19. Jahrhundert zurück. Bis vor kurzem ist das deutsche Turnen durch eine automatische Unterscheidung in zwei Parteien verstanden worden. Im Detail: Während das deutsche Turnen von Jahn als progressiv gilt, scheint das von Spieß konservativ zu sein.

Wir können aber nicht sagen, dass nur das militaristische Turnen von Spieß diszipliniert und schulgerecht war. Denn auch wenn im Turnen von Jahn die progressive bürgerische Weltanschauung enthalten war, vereinte Jahn die Leute des freien Willen zur Nation durch die folgenden Mittel:

— die Beschreibung des idealen Körpers, den die ursprünglichen germanischen Leute oder die griechischen und römischen Leute hatten;
— das auf die Turnanzüge gedruckte oder auf den Denkmälern eingravierte Symbol;
— die Chorsäge der Nationalhymne und der Kirchenlieder.

Wenn wir anerkennen, dass das deutsche Turnen von Spieß ein Programm zur Disziplinierung durch die externen Mittel der offentsichtlichen Zwangenergie war, sollten wir das von Jahn als ein Programm zur Selbstdisziplinierung betrachten. Jahn gelang es, durch dieses Programm im deutschen Volk eine nationale Gesinnung zu erwecken.

Schlüsselwörter：Körper, Symbol, Selbstdisziplinierung

１．はじめに

近代ドイツの学校体育は18世紀末の「ギムナスティーク（Gymnastik）」[1]に始まり、19世紀初頭には「トゥルネン（Turnen）」[2]に取ってかわられ、その後、「体育（Leibesübungen / Leibeserziehung）」という名称が一般化している。戦後、その名称が「スポーツ（Sport）」へと改められるのである。つまり、近代ドイツの学校体育は、「ギムナスティーク→トゥルネン→体育→スポーツ」へと変遷してきたことになる[3]。本研究では、ドイツ・スポーツ教育の基礎的研究として、汎愛派によるギムナスティークの形成からシュピースによるトゥルネンの制度化までの過程を、身体をめぐる権力作用に着目しながら検討する。

しかし、日本の体育が、「『学校』という制度機構内での事項として処理されてしまう宿痾」[4]を背負わされてきたのとは対照的に、ドイツの学校体育は、古くから社会体育との融合のもとに展開されてきた。それゆえ、ドイツの一特に戦前までの一学校体育と社会体育を厳密に区分することは困難である。そうした事情から、以下においても、

＊弘前大学教育学部保健体育講座
Department of Health and Physical Education, Faculty of Education, Hirosaki University

学校体育と社会体育を含む体育一般が対象化されていることを断っておきたい。

２．「私の身体」の誕生―汎愛派のギムナスティーク―

2．1 汎愛派以前

ドイツにイギリスからスポーツが伝播してくるのは19世紀以降のことであるが、それ以前のドイツにも競争的で身体的な遊戯、すなわちスポーツ的な文化が存在していた。中世に愛好されていたスポーツ的な文化の変容は、近代ドイツにおける学校体育の成立にも大きな影響を及ぼしている。

中世ドイツの社交の中心は酒房であった。手工業者の平均的な労働時間が12時間を超えるなかで、人々は祝祭的な行事と労働の後の一杯のアルコールに娯楽を求めた。都市貴族は専用の酒房を、手工業者のマイスターはツンフト会館を所有し、一般の庶民には公共の酒場が用意されていた。宴会の席では、サイコロ、カルタ、チェスなどが賭けの対象とされ、貴族の属する酒房団体では門閥ダンスや舞踏会が催され、市民のあいだでは男女が身体を寄せ合う踊りが流行し、庶民も路上のダンスを楽しんでいた。五月祭や聖霊降臨祭では、徒競走、競馬、九柱戯などのスポーツ的な行事が催され、都市に暮らす庶民は、皇帝や諸侯が催す馬上槍試合や各都市が開催する射撃大会を見物するなど、見世物としての娯楽も享受されていた[5]。

なかでも、射撃大会は、当時最も繁栄したスポーツ的な活動であった。都市防衛が重要な責務となっていた各都市は、弩や銃をもちいた射撃大会の開催によって射撃訓練を奨励し、防衛力の向上をはかっていた。公開射撃大会においては、射撃自体が娯楽として位置づけられるだけではなく、賭博小屋や飲食小屋といった娯楽施設も設けられ、射撃以外の余興として走・跳・投・競馬・九柱戯などの競技会が催された。とりわけ、身分を超えて参加が可能であった「富くじ（数合わせ）」は大きな人気を博していた。各都市を代表する競技者への歓迎セレモニーや優勝パレードも実施されるなど、射撃大会は、運営組織を整備し、参加者層を拡げる、いわゆる国民的祝祭の様相を呈するまでになっていたのである[6]。

15世紀も後半になると、各都市が傭兵を雇い始めたことから、射撃大会は訓練という軍事目的を後退させ、都市間の友好を促進させるための「社交と娯楽」として位置づけられるようになる。それにともなって、競技規則が整備されるなど、階級による参加制限という不平等性を残しつつも、射撃大会はイギリスのスポーツにみられたような近代化への道を歩み始める。

だが、30年戦争後の都市の没落と領邦絶対体制の確立とともに、射撃大会はその競争性と祝祭性を失っていく。30年戦争の終結を告げるウェストファリア条約後、17～18世紀のドイツは、「君主から庶民まで、国民全体の生活が最も荒廃した時代」[7] を迎え、巨額の開催費を費やしてきた射撃大会もその衰退を余儀なくされたのである。射撃大会のパトロンであった王侯貴族にかわって登場した領邦絶対君主にとって、射撃大会は不必要な習慣でしかなく、公的な射撃大会は禁止され、単純な訓練としての「射的を使った射撃訓練」が奨励された。競争的な遊戯は、音楽小屋、動物見世物小屋、手品小屋、遊技小屋、射的小屋のなかで催されるごく限られた祝祭へと退化し、後年、「トゥルネンの父」として登場するフリードリヒ・ヤーンが嘆いているように、多様な階級と地域を巻き込んだ祝祭は、人々の生活のなかから消失してしまったのである。

イギリスにおけるスポーツの近代化と、ドイツにおけるスポーツ的な文化の衰退を考えるとき、30年戦争がもった意味は大きい。本土が主戦場とならなかったイギリスに対して、自国が主戦場となったドイツの困窮はすさまじかった。しかしそれでも、ドイツにおけるスポーツ的な文化の衰退を、30年戦争にのみ起因させることは妥当ではない。30年戦争による被害には、各都市によって大きな差があったからである。例えば、戦禍を避けたハンブルクなどでは、海外との通商によって大きな商業的な成果があげられている。同様に、宗教権力や都市当局による弾圧がスポーツ的な文化の発達を妨げたという解釈も一面的であろう。プロテスタント教会が石投げや球打ちなどの遊戯を許容する場合もあったし、イギリスのスポーツをいち早く受容することになるブラオンシュヴァイクなどでは、農家の青年たちに馬乗りの練習をさせるために、都市当局によって競馬が奨励されることもあった。これらの事実は、30年戦争と宗教・都市権力による弾圧以外にも、スポーツ的な文化を衰退させる要因が存在していたことを示唆している。

クリスチャーネ・アイゼンベルクは、その要因

の一つに、階級社会の閉鎖性をあげている[8]。産業革命によって、早い時期から貴族階級と市民階級の垣根を超えた商業主義的な交流が盛んであったイギリスに対して、ドイツには排他的な貴族文化が根強く残っていた。ドイツの貴族階級は、富や財産によってではなく、諸侯から与えられる地位や特権によって階級が規定されていたために、貴族階級の地位は、イギリスのような個人主義的な競争によってではなく、諸侯の愛顧をめぐって争われ、貴族階級のあいだでは宮廷儀式や礼儀作法が重視されていたのである。ドイツの市民階級も、既得権益としてのツンフト制やマイスター制を享受しており、イギリスのような商業主義を発達させることはなかった。こうした階級文化にみられる閉鎖性が、イギリスのような個人主義にもとづく競争的な文化の形成を妨げたと言われるのである。

アイゼンベルクが指摘する二つめの要因に、「賭け」と「富くじ」の違いがある。イギリスにおけるスポーツの発展には、「賭け」が大きな役割を果たしていたが、ドイツにおける「富くじ」の隆盛は、逆にスポーツ的な文化の発達を妨げた。イギリスでは競馬やボクシングなどの身体活動が賭けの対象とされたのに対して、ドイツでは、サイコロ、カルタ、チェス、富くじなどの非身体的な文化が賭けの対象とされた。なかでも広く庶民のあいだで親しまれていた富くじは、「間接的にではあれ、スポーツの発達に負の影響を及ぼした。それは、お金、時間、エネルギーをスポーツ的な競争から奪った」[9]と言われるのである。

かくして、ドイツにおけるスポーツ的な文化は、イギリスにみられたような近代化を達成することなく、その消滅を余儀なくされる。ドイツの身体文化が、宮廷のなかでおこなわれるフェンシングや騎兵隊の乗馬といった「競争的なものではなく、訓練的なもの(Übung)」[10] としてその姿をとどめていくなかで、体育は、絶対主義国家の厳密な身分制のもと、国家指導者の育成を重視する騎士学校において実施されることになる。中等教育施設においては、教科としてではなく、空き時間に、師範の指導の下での騎士運動やレクリエーションとしての身体運動が実施され、後にトゥルネンに位置づけられる「授業のない曜日の午後の遊戯（Spielnachmittage)」の嚆矢ともなっている。しかし、騎士運動は、当時、「最も堕落した」と評されていた宮廷のお抱え師範によって実施される形式的な技の伝授にとどまっていた。こうした形式的な技の伝授に終始した騎士運動への批判と、レクリエーションとしての身体運動を人間形成の手段として捉え直そうとする気運のなかから、ギムナスティークと呼ばれる文化が萌芽することになる。

2. 2　ギムナスティークと身体

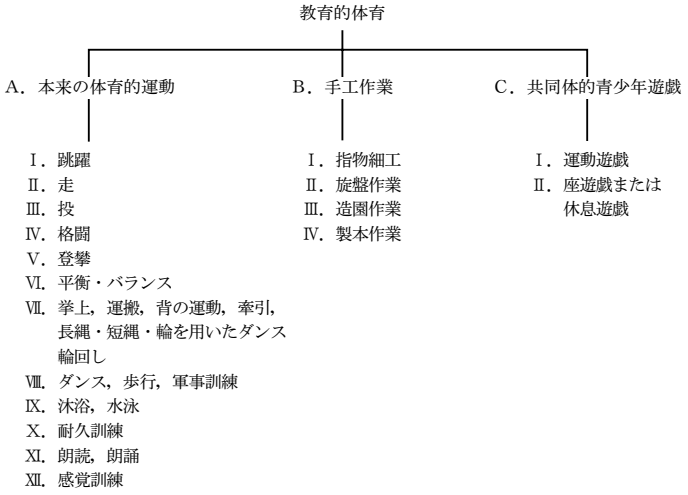
18世紀のドイツにおいて、ギムナスティークの理論化に着手したのが、汎愛派の教育学者たちであった。フランス革命に衝撃を受けた汎愛派の教育学者たちにとって、特定の階級に占有され、宮廷的規範を付与された騎士運動は変革されるべき対象に他ならなかった。

1744年にヨハン・バセドゥがデッソウに設立した汎愛学校では、旧体制と真っ向から対立する市民的な教育観のもと、ダンス、乗馬、フェンシングなどの身体運動が課せられた[11]。しかし、バセドゥ自身、「身分の高い階級のための授業であって、大衆のための授業ではない」[12] と断言していたように、近代的な個人主義の観念はまだ芽生えていなかった。1784年には、ゴットフリート・ザルツマンがシュネッペンタールに汎愛学校を設立し、「身体運動による全人形成」という理念のもと、「午前11時から12時にかけて、走、跳、投、徒歩旅行などの運動」[13] を実施し、その活動をギムナスティークと名づけている。しかしそこでも、ギムナスティークは学校の制度としては確立されていなかった。このような状況の改善をはかるべく、ギムナスティークの制度化を目指したのが、ペーター・フィローメとヨハン・グーツムーツであった。

フィローメは養生法や薬学も含めた広い意味で体育（Körpererziehung）という言葉をもちい、身体の形成を目指す運動をギムナスティークと呼んだ。そして、ギムナスティークを強制力の程度に応じて三つの運動に分類し、学習活動の配列を示したのである[14]。成田十次郎が、「ドイツ近代体育理論成立への第一歩」[15] と評するように、そこに今日の学校体育へとつながるプログラム的な思考の萌芽をみることができる。さらに、1785年にシュネッペンタールの汎愛学校に赴任したグーツムーツは、八年間に及ぶ自らの教師経験を理論化した『青少年のギムナスティー

表1　グーツムーツのギムナスティークの体系

（森田信博（1996）グーツムーツのボールゲーム論について．秋田大学教育学部紀要 教育科学部門．49．p. 40）



ク（Gymnastik für die Jugend）』を著し、フィローメの教材分類を合理化させる。グーツムーツは、教育計画（Plan）に「身体の形成（Bildung des Körpers）が取り入れられていないということは、許し難いことであり、学校という概念の中に身体形成（Körperbildung）という考えを誰ももたないこと」[16] は悪い兆候であると言い、「すべての青少年に同じ身体運動を実施させる」[17] ために、「計測可能な記録」「感覚」「ドリル練習」を重視するギムナスティークのプログラム化を目指し、その特性・施設等にも言及しながら、跳躍、走、投、格闘、登攀、ダンス、軍事訓練などの「身体運動」、指物細工や旋盤作業などの「手工仕事」、運動遊戯や座遊戯などの「共同体的青少年遊戯」の分配原理と教材配列を示したのである（表１及び表２）。つまり、バセドゥに始まり、グーツムーツによって完成された汎愛派の理論づくりは、ギムナスティークを学校の教育計画のなかに位置づけるために、「誰が（教師）、何を（内容）、どこで（施設・用具）、どのように（指導）、どれだけ（時間）実施すればよいのか、などという疑問」[18] に答えようとするプログラム化の運動だったのである。

汎愛派の教育学者たちは、ギムナスティークの基礎となる教育思想をジャン・ジャック・ルソーから学んでいる。なかでも、ルソーの「自然」と「個人」の関係と「感覚」の概念は、ギムナスティークの理論形成に強い影響を与えた。ルソーによれば、誰しも人間は個人として自由であり平等である。しかし、同時に、個人は二つのものに依存している。「自然に由来する事物への依存と、社会に由来する人間への依存」[19] である。教育者は、自然の法則性を経験的に理解させ、文明的な負荷から子どもたちを解放しなければならない。ルソーにとって、自然状態にある人間は「人間である」ことにおいて平等であるが、「人間である」ためには自然法則にしたがって身体を動かせるように訓練しなければならない。ルソーに学んだ汎愛派にとってもまた、人間は「その意志に基づいて、魂の定めた基準にしたがって行動し、身体を従わせ、身体を役に立つもの」[20] にしなければならなかった。汎愛派の期待する人間像は「精神の意のままに行動できる人間」[21] であり、「独立独歩の行動人」[22] であって、そのための訓練は、「くつがえしえない自然の法則」[23] と「人間の自然本性としての活動衝動」[24] にしたがって遂行されなければならなかった。オイゲン・ケーニヒが指摘するように、結局のところ、汎愛派にとって、「自分の身体を支配することによってはじめて人間は、自律的な主体（Subjekt）になる」[25] 存在だったのである。ここに普遍的真理としての「自然」と、「身体」を「私」に従属させる「私の身体」という観念が登場したのである。

汎愛派にみられるルソーからの影響は、「感覚」の概念にも及んでいる。汎愛派にとって、「感覚」とは、人間が現実を感じ取るための重要な身体的な能力である。人間は、感覚によって「観念（Vorstellung）をえる」[26] のであり、感覚なしには観察をなしえない存在なのである。この思考には、ルソーが示した「自然な身体」と「イメージ」と

表2　グーツムーツの共同的青少年遊戯

（森田信博（1996）グーツムーツのボールゲーム論について．秋田大学教育学部紀要 教育科学部門．49．p. 40）

共同体的青少年遊戯

運動遊戯
- A．観察力や感覚的判断力の遊戯
  - a）ボール遊戯
  - b）円盤遊戯
  - c）木球戯
  - d）九柱戯
  - e）支柱遊戯
  - f）冬の遊戯（雪上，氷上遊戯）
  - g）仲良し遊戯（目隠し遊戯など）
  - h）夜の遊戯
  - i）一人遊戯
- B．注意力の遊戯（鬼ごっこ，ハンカチ遊戯）
- C．創造力や機会の遊戯（手段遊戯）
- D．シャレやおどけ遊戯

座または休息遊戯
- A．観察力や感覚的判断力の遊戯
  - a）仲良し遊戯
  - b）一人遊戯
- B．注意力の遊戯
  - a）仲良し遊戯
  - b）一人遊戯
- C．記憶力の遊戯
- D．創造力や機知の遊戯
- E．鑑識力の遊戯
- F．理解力や高度な判断力の遊戯

の密接な関係が映し出されている。グンター・ケバウァは次のように指摘している。「ルソーは自然の状態を『もはや存在せず、おそらく存在しなかったし、たぶん今後も存在することはけっしてないであろう』と規定している。つまり、ルソーの自然の観念（Vorstellung）は、彼自身のイメージ（Imagination）のなかに存在していた」[27]。ルソーにとっては、現実の自然性ではなく、観念のなかの自然性こそが重要なのであった。たとえ純粋な自然状態が現実には実在不能だとしても、人間がおかれている人工的で文明的な社会状態を正確に把握するために、観念としての自然が必要とされたのである。このルソーの影響下に、グーツムーツは、「われわれのおかしている罪をわかりやすくするために」と前置きしながら、自然状態にある身体のイメージについて次のように語っている。「原始ゲルマン人の丈夫な婦人は仕事中に畑で子どもを生み、近くの小川でその赤ん坊を洗い、涼しい木の葉でくるんだ。つまり、戸外の清らかな自然が産褥であった。生まれたばかりのかよわい世界市民に水浴びや水もぐりをさせることは、おそらく健康の試練であったし、たしかにかよわい体の鍛錬であったにちがいない。こうしてより強化されて、子どもは裸でじかに冷たい大地に寝かされ、次第に手足の使い方を覚えた。このような自由にさせておくことが乳児のために最も良い結果を与えたにちがいなかった」[28]。つまり、グーツムーツは、自然状態にあった原始ゲルマン人の身体を理想的な身体のイメージとして称えながら、近代社会を生きるドイツ人の身体の虚弱を嘆いたのである。グーツムーツにとって、原始ゲルマン人は、「身体の健康と力、器用さと持久性、精神の剛毅さと古代ドイツ人の忠誠心、勇気と沈静」[29] を備える存在であったのに対して、ドイツ人の身体は、「身体の衰退、英雄的性格の変質、弱くみじめになってゆく世代」[30] によって特徴づけられる存在だったのである。

この「原始ゲルマン人の身体」という汎愛派が描いた理想的な身体のイメージは、さらに、「市民階級の身体」にまで拡張されている。グーツムーツは、「宮廷の道徳などというものは、市民にとっては、宮廷の十字架やベルトや鍵と同様、まったくふさわしいものではない」[31] と堕落した宮廷文化と貴族階級の身体文化に嫌悪感を隠さず、フィローメは、「自由と法の融合を市民共和国に見出」[32] し、「国家＝法＝秩序と人間の自由の統一が存在し得るのは、やはり市民共和国である」[33] と明言した。グーツムーツが「上流階級の上品さと臆病な精神（宮廷文化）」に「ドイツの若者の男性的気質」を対置させ[34]、「軍曹の気品のある振り舞い（軍人としての成功は市民階級のキャリアの象徴）」を理想的な身体イメージとして描いたのも[35]、「宮廷的な身体」への対抗として、理想的なドイツ国家の秩序を保つ「市民階級の身体」を掲げようとしたからに他ならない。つまり、汎愛派のギムナスティークは、「身体を意のままに動かせるようになる」[36] ことを目標に掲げ、「原始ゲルマン人の身体」と「市民階級の身体」を理想的な身体のイメージとして描き出すことで、「個人」を「原始ゲルマン」と「市民」と

いう理想的な「全体」へと統合しようとしたのである。ここに、自由で平等な個人が意のままに操れる「私の身体」を理想的で全体的な何ものかへと統合しようとする学校体育の原型が示されたのだと言えよう[37]。

3.「国民の身体」の誕生―トゥルネンの制度化―

3. 1 国民プログラムの成立 ―ヤーンからシュピースへ―

19世紀に入ると、イエナでの決定的な敗北を契機に、ドイツはフランス軍の支配下におかれることになる。封建勢力の追放者としてあらわれたフランス革命軍も、ヨーロッパの覇権を握ろうとする征服者としての顔を露呈させ、ドイツ国内の革命運動は、フランスからの解放運動へと変転する。イエナ敗戦の前年、プロイセン政府はすでに身体訓練を学校の教科として確立させようとする意図をもっていたと言われるが[38]、イエナでの敗戦がその制度化への期待を急激に高めたことは疑いない。当初、プロイセン政府は、グーツムーツの提案にもとづいて教育計画にギムナスティークを組み入れようと企図するものの[39]、ギムナスティークは「汎愛学校のような富裕階層子弟を対象とする特殊な学校」[40] に適用されるプログラムでしかなく、国民教育の諸条件に応えうるものではなかった。そこにヤーンが登場してくる社会的な背景があった。

幼少のころから自制心に欠けるところがあったと言われるヤーンは、借金や喧嘩などの素行の悪さを理由に、1803年に大学を退学処分となっている。しかし、学生運動が盛んな当時の社会情勢のなかにあって、大学当局に楯突いたのはヤーンだけではなかった。ヤーンは進歩主義的な学生運動の信念にもとづいて行動したひとりの学生でもあった。この退学処分を契機に、貴族的で封建的な大学組織を改革しようとする意志を固めたヤーンは、家庭教師として働くなかで、身体訓練の重要性を意識し始め、ギムナスティークの実践方法を学ぶべく、シュネッペンタールにまで出かけている。

1809年にベルリンの寄宿舎学校で助教師の職をえたヤーンは、プロイセンの敗北に強い衝撃を受け、多くのドイツ知識人たちと同様、熱狂的な愛国主義を表明し、1810年に『ドイツ国民性』(プロイセン政府の依頼を受けたと推測されている）を出版する。その著書のなかで、「国民のための学校制度の充実、市民軍の教育、身体への配慮」[41] という改革案を示し、祖国解放と祖国統一のために、愛国心と強健な身体の育成を目指すトゥルネンの構想を提案する。同年の夏には、「授業のない水曜日と土曜日の午後」に20人前後の生徒たちを集め、ギムナスティークが実践されていた町の門前から徒歩旅行に出かけている。同年の冬には、遊戯的な活動が取り入れられ、その後、陣取り遊戯、騎士と市民、ドイツ球戯などの遊戯的な活動、さらにはフェンシングや射撃などのスポーツ的な活動もおこなわれるようになる。こうした活動は、ヤーンの提案によって、外国語に由来するギムナスティークではなく、ドイツ語に由来すると考えられた「トゥルネン」という言葉で呼ばれた。1811年には、徒歩旅行の目的地であるハーゼンハイデに柵で囲まれた戸外の体操場（Turnplatz）が設けられ、登板台やジャンプ台などの体操器具が設置される。ヤーンは体操場を学校から切り離された一つの国民教育施設であると考え[42]、参加者数と練習内容に相応しい施設・用具とその広さ、大きさ、数、設置場所などに関する具体的な提案をおこなっている。こうして、ヤーンは、「近代体育実現の道」[43] を開いたのである。

トゥルネンの施設の維持にともなう個人的な経費の負担は、後援者からの資金援助のために、ごく安価なものにとどまっていたが、なかでも、ハーゼンハイデの体操場は、国有地として管理され、練兵場としても使用された。1815年の解放戦争では、ハーゼンハイデの体操場から多くの体操家（Turner）たちが義勇軍に志願し、トゥルネンはプロイセン政府からの財政的支援を取りつけることに成功する。その頃にはヤーンをはじめとする体操教師（Turnlehrer）たちも国家からの俸給を受けるようになり、体操家の数は1,600人前後にまで増加している[44]。

ヤーンの提案にもとづいて開設された体操場には、ティー（Tee）と呼ばれるクラブハウスが設置されるなど、広く市民を集めるための工夫も施された。ヤーンはハーゼンハイデにベルリン市民を集わせるために、公開の演技会を企画し、国民的記念日に体操祭（Turnfest）を開催した。1813年の演技会には10,000人もの市民が集ったこと

が報告されている[45]。演技者の数も着実に増え（1811年の300人から1812年の500人へ）、幅広い参加者層を集めることに成功する。ヤーンは、自著『トゥルンクンスト（Turnkunst：直訳はドイツ体操術）』において、体操場は舞台ではないが、秘密の部屋であってはならず、観衆の前でトゥルネンをおこなうことでトゥルネンへの理解者を増やし、参加者数を増やすのだと明言している[46]。ヤーンは、大衆をトゥルネンに取り込むために、戸外の体操場で演技会や体操祭を開催したのである。

その一方で、ヤーンは、トゥルネンをプログラム化し、学校の制度として確立させることも忘れなかった。ヤーンは、トゥルネンを計画的・効率的に指導できるように、班別学習と学習二分法を開発している。トゥルネンの学習時間は、前半の自由学習（Turnkür）と、休憩を挟んだ後の規定学習（Turnrast）に区分され、前半の自由学習では体操教師とフォアトゥルナー（Vorturner）[47]が班（Riege）に指示を与え、場をコントロールする。後半は、体力、技術、年齢に応じた組（Abteilung）が配置される[48]。こうしたプログラムのもとに、ヤーンは愛国心と強健な身体の育成だけではなく、市民的な理念でもあった、自ら考え、自ら行動する「自主的な個人の育成」と、「平等原理にもとづく集団の形成」を重視した。ヤーンは、「国民教育は、完全な人間の、完全な市民の、民族の完全な一員としての根源像を、各個人の中に具現しなければならない」[49]と言い、ギムナスティークにみられた個人主義を尊重しながらも、そこに新しく集団的な概念をもち込んだのである[50]。

なかでも、「平等原理」が特に重視された。体操家たちは「親称（Du）」と「兄弟（Bruder）」で呼びあい、誰もが入手可能な麻を素材とする体操服を着用した。トゥルネンにおける班は、実践者たちの体操技術の優劣に応じて決定され、フォアトゥルナーは、多くの場合、「下から」選挙で選ばれた。そうした意味において、トゥルネンの班はスポーツの「チーム」に、フォアトゥルナーは「キャプテン」に対応していた。ヤーンのトゥルネンには、間違いなく、近代革命を目指す市民階級の進歩主義的な理念が含まれ、その活動には市民運動としての性格がともなっていたのである。しかし、注意しておくべきは、イギリスにおけるスポーツの「チーム」が純粋に文化的な性格をもっていたのに対して、トゥルネンにおける「班」には「小さな戦闘部隊」という軍事的意味が付与されていたことである。トゥルネンには、祖国解放と祖国統一のための軍事訓練としての性格が色濃く反映していたのである。トゥルネンにおいても、スポーツにおけるチームの競争と似たような班の競争が実施されていたが、それはあくまでも演技会や体操際での演技上のものに過ぎず、スポーツの競争とは明らかに一線を画するものであった。

市民運動としてのヤーンのトゥルネンは、1818年に大きな転換点を迎える。多くの体操家たちが義勇軍として戦った解放戦争の後、ドイツ統一と憲法の制定を弾圧する「メッテルニヒの反動」が勢力を拡大し、プロイセン政府がトゥルネンの弾圧にのり出したのである。1817年のバルトブルク祭で一部の体操家たちが反ドイツ的な書物を焼却した事件をきっかけに、トゥルネンは政府からの信用を失い、1819年にはヤーンをはじめとする愛国主義的な体操家たちが次々と逮捕され、1820年には「トゥルネンの禁止」が正式に公布される。だが、その弾圧にもかかわらず、列強各国の不安定な国際情勢のなかで、プロイセン政府はトゥルネンの軍事訓練としての価値を手放し難かった。そこに「体制的なトゥルネンの確立」という課題を背負って登場するがアドルフ・シュピースだったのである。

シュピースは、1842年、プロイセン政府に「国民教育へのトゥルネンの導入」と題する論文を提出し、新しいトゥルネンの全体像を描き、トゥルネンの系統的配列、教員養成、時間数、施設、評価、行事、軍人育成などについて提案している。1847年の論文「トゥルネンについて」では、ヤーンのトゥルネンとの違いが明確に主張されている。成田によれば、シュピースのヤーン批判は、①道徳に反抗する不遜な人間の育成、②非教育的で無能な指導者による指導、③施設の不便さ、④少数で強力な青年のみの任意参加と女子の除外、⑤学校種・年齢・性を無視した教材体系、⑥練習時間の配当の不備、⑦大量一斉指導の七点に要約され、その端的な違いは、「批判的で行動的な国民づくりのためのヤーンのトゥルネン」と「従順で奉仕的な臣民づくりのためのシュピースのトゥルネン」に集約される[51]。つまり、両者の相違は、革命運動の盛り上がりを背景にトゥルネンの制度化

を目指したヤーンと、反動的な保守体制のもとでトゥルネンの制度化を完成させたシュピースとの違いに求められるのである。シュピースは軍事訓練の基礎として、生徒、学生、体操家たちに従順な服従を求め、「学校訓練と戦争訓練とはその本質において1つ」[52] であるという認識のもとに、器具をもちいた体操と遊戯的な活動を放棄し、秩序的な徒手体操と姿勢の維持を中心に据えるドリル練習を展開した。「シュピースの教科体育の実際は、『集まれ！』といった号令で生徒を集め、まず、『気を付け！右向け右！左向け左！』、『気を付け！先頭基準に左に三歩間かく開け！』『気を付け！一歩間かく中央に集合！』といった具合に秩序訓練を繰り返してから、『気を付け！両手を前から上にあげ、横に開き、下におろす！用意始め！1、2、3、4……』といった具合いに集団徒手体操を教師の合図で繰り返すもの」[53] だったのである。

軍事訓練的なシュピースのトゥルネンは、生徒や学生ばかりではなく、1870年の独仏戦争に参加し、その思い出に浸っていた高齢の体操家たちにも快く受け入れられた。彼らは、「熟練、勇気、支配を常に高い男性的なものに昇華する」訓練に好んで参加した。「足の美しい開閉」、「胴体の前に胸を出し」、「頭を上げる」運動は、「少年らしい」とみられていた器具による体操よりも、力強い男性的なイメージと一致していたからである[54]。単純な整列や方向転換も、教練の良き思い出を覚醒させた[55]。シュピースのトゥルネンは、彼らにとって、ドリル的な軍事訓練を教育に昇華させたものに他ならなかった。

皮肉なことに、トゥルネンを国民教育における必修教科として、すなわち学校体育として確立させたのは、このシュピースの軍事訓練的なプログラムであった。シュピースは社会教育を重視する一方で、トゥルネンを「教育の『基礎』である学校に導入し、制度化し、他教科と同一の地位にまで高めるべきである」[56] と主張していた。シュピースは、体操教師の地位が低くみられていることを嘆き、体操教師も他の教師と同じようにクラスを担任するように働きかけた。シュピースにしてみれば、トゥルネンは知識教科と同じように、全国民に与えられるべきものに他ならず、学校の必修教科としてのみ、トゥルネンは「国民のもの」となりうるのであった。成田が指摘するように、トゥルネンの必修化を実現させるためにこそ、シュピースは、①学級単位制による体育授業、②発達に応じた時間配当、③学校の種類に応じた体育教師の育成、④施設や用具の詳細、⑤教材論、⑥徒手・隊列運動を中心とする集団秩序訓練法といったトゥルネンのプログラムを完成させたのである[57]。その結果、シュピースのトゥルネンは、当時の軍国主義的な国際情勢を背景に、多くの国々に学校体育のプログラムとして採用されていく。「ヨーロッパ諸国ではほぼ1920年代まで、日本でも1945年（第２次大戦の終了時）まで、ほぼそのような体育訓練が教科の主流」[58] となっていったのである。この史実を振り返るとき、成田が指摘するように、「体育は普及すればするだけ良いとか、制度化すればするだけ発展したといって、手ばなしで賛美してよいのか」[59] という問題が容易に想起されるのであり、この指摘は同時に、近代的な国家制度として体育を確立するために要請された国家主義的なプログラムの問題を改めて考え直す一つの契機ともなるだろう。

3．2　伝統意識・国民的祝祭・シンボルと「自己規律化」

しかしながら、シュピースのトゥルネンだけが、軍事的な要求に応えうる学校体育のプログラムであったと言うわけではない。実際、プロイセン政府によるヤーンのトゥルネンの禁止令以降も、ヤーンのトゥルネンは、軍事訓練を隠れ蓑にしながら、その参加者数を拡大し続け、1840年には全国的な統合組織を結成するまでに成長している。結果的にみれば、トゥルネンの禁止は、その意図とは逆に、進歩主義的な理念に魅せられた多くの人々の参入を招き、参加者数の増加をもたらした[60]。例えば、ハーゼンハイデでのトゥルネンの活動が禁止されたあと、ヤーンの同僚であったエルンスト・アイゼレンは、プロイセン文部長官の許可のもと、体操教師を養成する商業主義的な体操施設を開設している。プロイセン政府がアイゼレンに課した唯一の義務は、戸外に大々的に大衆を集めることを放棄し、体育館（Turnhalle）のような室内で授業をおこなうということだけであった。アイゼレンは体育館でのトゥルネンの実施を可能にするために、「段違い平行棒」のような、もち運びと組み合わせが可能な体操器具を開発し、体育館で効率的な練習をおこなうためのプログラムを

開発している。さらに、トゥルネンの禁止が正式に解かれた一年後には、ヤーンの信奉者であったハンス・マスマンがプロイセンの学校体育の統括長に昇進する。進歩主義的な理念を包摂するヤーンのトゥルネンが完全に抑圧されたというわけではなかったのである。むしろ、19世紀から20世紀初頭を通じて近代ドイツ国家の形成に強い影響力を及ぼしたのは、大衆の動向を捉えたヤーンのトゥルネンであった。

ヤーンのトゥルネンにおいては、汎愛派のギムナスティークやシュピースのトゥルネンにおいて重視されたドリル練習は禁止されていた。ドリル練習は、あからさまな軍事訓練を想起させるものであり、進歩主義的な改革者としてのイメージに反するものだったからである。ジョージ・モッセやアイゼンベルクが指摘するように、ヤーンは「軍事的モデルの抑制」[61] を追求し、「軍隊的規律・訓練の緩和」[62] を宣言していたのである。ヤーンにとって、愛国主義的な軍事訓練は個人の「自由意志」と集団の「平等原理」にもとづくものでなければならなかった。ヤーンはトゥルネンへの参加とその責任を個人の自由意志に委ねるというやり方で、多くの人々をトゥルネンに熱中させ、軍事訓練の無意識化に成功したのである。だが、その成功を導いたヤーンの能力は、論理的な思考能力にではなく、そのカリスマ性にあった。ナチ時代にヒトラーの『我が闘争』が、マルクスの『資本論』のようなバイブルにならなかったのと同様に、ヤーンの思想も書かれたページを離れ、カリスマ的な魅力によって大衆のあいだに普及していった。例えば、トゥルネンの理想的な身体イメージとして原始ゲルマン人の雄雄しい身体を掲げたヤーンは、自らが理想的な身体モデルを表現すべく、髭をたくわえ、古典的なドイツ衣装を身にまとい、晴天の日の会議にもひとり長靴を履いて出席し、反権威主義的に振舞うことで、人々の共感を獲得した[63]。

外国語に由来するギムナスティークという言葉を避け、ドイツ語に由来すると考えられたトゥルネンという用語を採用したことも、大衆を魅了する一つの要素となった。ドイツ語に由来するとされた数多くの専門用語（トゥルネンの技術・用具・施設等を示す用語）は、短く扱いやすい言葉によって表現され、宣伝効果を獲得し、「フランス支配」「ドイツ社会の荒廃」「伝統的価値観の崩壊」という危機的な状況におかれていたドイツの大衆に「幸福な時代であったドイツの過去の記憶」[64] を呼び起こさせた。それらの専門用語は、フランスへの嫌悪感のなかで普及したばかりではなく、市民階級の言葉とみなされることで、トゥルネンの技術の貴族的な起源を隠蔽した。ヤーンが創出し、瞬く間に若者の人気を博した体操服も、軍事的な制服というよりも、原始ゲルマンを表現する文明的な制服であるとみなされていた。ヤーンは原始ゲルマンの衣装に、部分的にギリシア様式を取り込みながら、美しい身体を表現する体操服をデザインし、伝統意識（歴史的連続性）を覚醒させたのである。

ヤーンはさらに、歴史的な建造物と印象的な風景という舞台装置のまえで、ヘルマン会戦から解放戦争に至るまでの会戦報告を読み上げさせている。なかでも、ヘルマン記念碑に顕彰されたローマ軍に対するゲルマン人の勝利、中世の聖俗諸侯に対する農民反乱が模範として示された。「ヤーンにとってギリシア人とゲルマン人はともに『聖なる民』であり、実際にはギリシア的な美の概念がゲルマン的シンボルで取り巻かれているにもかかわらず、ギリシア的な美の概念が一つの理想型であることは変わりなかった」[65]。ヤーンは国民的記念碑の建築を提唱し、あらゆる時代のあらゆる民族がギリシアやローマの神殿へ巡礼したという理由で、古代ギリシア・ローマの記念碑を普遍的な模範として示し、歴史的伝統と国民的記念碑の魅力を結びつけたのである。古代ギリシア・ローマの様式が「国民史のシンボルとして、鉄やダイヤより強固に、花冠をもって祖国を奉じる」[66] 国民的記念碑に必要とされた。ヘルマン記念碑の前では、トゥルネンの演技会が開催されるなど、伝統意識を覚醒させる熱狂的で厳かな国民的祝祭のなかで、自由意志にもとづいて体操祭に参加した多くの人々は、無意識のうちに「国民」へと統合されていったのである。

体操際の開催に際しても、伝統意識と国民意識を覚醒すべく、国民的記念日がその開催日に選ばれている。ヤーンは、ヘルマン戦争記念日（９月８～10日）、メルゼブルク戦争記念日（３月15日）、宗教自由記念日（７月23日か９月25日）を国民の祝日とし、共同体の意識を高揚するよう提案した。こうして、ヤーンは、大衆が生きる時間を国家の時間へと統合させたのである。

体操祭では、愛国歌と賛美歌が合唱され、祈りがささげられ、愛国的説教と松明行列がおこなわれ、あたかも宗教的な厳かな雰囲気のなかで共同体の体験が媒介された。ヤーンは民族が歴史に覚醒することを、キリスト教と対応させ、創造性の源泉と呼んだ[67]。ヤーンは、はっきりと次のように宣言している。「祝祭は、人間生活に不可欠な要素をなしている。祝祭のなかに、個人を全体に統合する力が働き、それによって人間は全体へと統合されていく。その統合体のなかで、感じ、目覚め、鼓舞されることによって、彼らは共同体の一員、全体の一員であるという自覚をもつことになる。しかも、祝祭は発生的・内容的にみて、国民的・歴史的存在に他ならない。したがって、人々はこの歴史的・国民的祝祭のなかで、彼らが何をなすべきかについて感じ、自覚してくるのである」[68]。

ヤーンのカリスマ支配は、1868年のドイツ体操連盟の成立以後、ヤーンの弟子たちによって官僚的支配へと移行されるが、ヤーンによって生み出された伝統意識と国民的祝祭とシンボルを利用するという手法は継承されていく[69]。例えば、ヤーンの崇拝者であり、1861年から1895年の間、トゥルンフェライン（Turnverein：直訳はドイツ体操クラブ）の委員会とドイツ体操連盟の指導者として活躍し、1895年にドイツ体操連盟の代表者となったフェルディナンド・ゲッツは、トゥルネンにドイツ帝国の政治的なシンボルを統合させている。黒―白―赤の旗が皇帝の公布によって国旗として説明されたのと同じ時期に、ゲッツは体操祭における勝利の栄冠として黒―白―赤のバンドを与えている。反ユダヤ主義的で国民的な戦闘の歌としてドイツ国歌が歌われた20世紀の初頭、ドイツ体操連盟はドイツ国歌をトゥルネンの歌とみなした。ヘルマン記念碑（1875）、ニーダーバルト記念碑（1883）、諸国民記念碑（1894）などの国民的記念碑のためにも寄付金を募り、記念碑の前で集会をおこなっている。

この伝統意識を覚醒させる厳かで熱狂的な国民的祝祭のもと、1880年代から1890年代までに、ヤーンのトゥルネンは、一つの大きな大衆運動にまで発展する[70]。ヤーンによって生み出され、彼の弟子たちに受け継がれることで、大衆運動にまで発展したトゥルネンは、伝統意識と国民的祝祭を利用し、原始ゲルマンと古代ギリシア・ローマ、そしてキリスト教のイメージをシンボリックに表現しながら、愛国主義的な軍事訓練を自由意志にもとづいて追求させる内的支配に成功したのである。シュピースのトゥルネンがむき出しの強制力による「外的規律化」のプログラムであったとすれば、ヤーンのトゥルネンは、自主的に規律を守る「自己規律化（自発的服従）」のプログラムによって「大衆の国民化」を達成したのである。別言すれば、ギムナスティークによって示された「私の身体」を理想的な「原始ゲルマンの身体」と「市民の身体」へと育成するという図式は、トゥルネンによって「原始ゲルマンの身体」と「古代ギリシア・ローマの身体」を理想的な身体イメージとする「国民の身体」の形成へと逢着したのである。ここに、「私の身体／他者の身体」「国民的な身体（理想的な身体）／非国民的な身体（非理想的な身体）」という明確な境界線が引かれた事実も、記憶されておいてよいだろう。

3．3　市民運動としてのトゥルネンの挫折

1842年にトゥルネンの禁止が解かれたあと、地域のトゥルンフェラインが数多く設立される。フェライン（Verein：直訳はクラブ）においては、指導者は会員のなかから選ばれ、体操の器具や用具も会員自らによって製作された。それゆえ、商業主義的な施設よりも会費を安く抑えることができ、多くの参加者の獲得に成功する。学校・商業施設からフェラインへ、という中心的な組織形態の移行は大きな社会的意味をもっていた。フェラインは、階級間交流や異年齢間交流を通して、市民的な理念や価値観の浸透を促したからである。イギリスのスポーツにみられたアソシエイションと同様、トゥルンフェラインにおける階級の開放性（社交と階級間交流）は、「個人主義」と「平等原理」の浸透に貢献したのである。しかしながら、イギリスのスポーツとは異なり、ドイツ体操連盟という政府に媒介された国家規模の組織へと統合されたドイツのフェラインが、階級の開放性を十分に開花させることはなかった。

フェラインを統括していたドイツ体操連盟には、労働者体操連盟、ポーランド人の少数派であるソコール連盟、ユダヤ人体操連盟、党派的な政治に無関心であった自由ドイツ体操連盟が加盟していた。ソコール連盟は12,000（1913年）人、ユダヤ人体操連盟は2,500（1912年）人、自由ドイツ体操連

盟は20,000～50,000人、労働者体操連盟は150,000人（1913年）の参加者を抱えていた。それらは例えば、当時の歌唱連盟（1912年の2050,001人）やカトリック青少年連盟の国家統一体（1914年の147,000人）と比肩しうる数である[71]。トゥルネンの大きな統合力は、そのような数字からだけではなく、参加者の多様な階層性からも読み取れる。1860年代には、大学教育を受けた市民の全国民に占める割合は0.5％ほどに過ぎなかったが、ドイツ体操連盟には4.5％から7.6％の大学教育の経験者が参加していた（学生組合の結成後に激減）。それ以外にも、靴職人、衣服職人、機械工、金属職人、パン職人などの生業者を含む手工業者に事務職員を加え、市民階級より下層の参加者は約42% に達していた[72]。ヤーンを中心に市民的な運動として出立したトゥルネンの社会的基盤は、ヤーンが望んだ通り、「国民」的な広がりをみせていたのである。参加者の階級属性にみられる混合的な構造は、ドイツ帝国の全期間を通じて保持されている。1903年のプロイセン政府の年間報告書によれば、「いずれの大きなトゥルンフェラインにおいても、学生、医者、上級教師、エンジニア、ときには神学者までも参加していた」[73]。

アイゼンベルクが指摘するように、この市民運動への多様な階層の参加という点において、トゥルネンは、イギリスのスポーツと似たような機能を果たしていた。つまり、どちらも市民階級の文化を他の社会層に広めることに成功したのである。しかし、イギリスの市民階級が大衆的な身体文化を市民階級化することでスポーツを創出したのに対して、ドイツの市民階級は市民運動としての側面を含みつつ形成されたトゥルネンを大衆に広めていったのである。さらに、イギリスのスポーツマンが多様な社会的な性格をもつ各スポーツ種目に分離していったのに対して、ドイツの体操家はドイツ体操連盟という国家的な組織のもとに統合されていたのである。

統計的な数字から離れ、ドイツ体操連盟のもとに統合されたフェラインの実態を見るならば、ヤーンの理念であった「平等原理」が、ほとんど機能していなかったという事実が理解される。とりわけ、階級間の分離は「教養知識人」と「実務生計者」、「市民」と「労働者」の間で顕著であった。教養知識人層の参加は、フェラインの社会的価値を引き上げるという理由で歓迎されたのに対して、労働者の参加は野蛮なものとみなされた。1909年に、プロイセン政府のドイツ体操監察官であったカール・メラーは、「『教養知識人』は、トゥルンフェラインを『社会に適合したもの』とはみなしていない」[74] と発言している。メラーによれば、トゥルネンの徒歩旅行は、教養知識人にとって「自然との交流における絶望的な正気さ」に匹敵する不快な活動であり、「万歳」のけたたましい叫び声は、教養知識人の社交様式に反するものだったのである。

こうした教養知識人からの反発のなかで、ドイツ体操連盟は階級間交流を可能にする競技会を放棄し、同じ服装と旗と徽章を普及させるフェラインの競争的な交流を制限することが、トゥルネンに市民的価値観を取り戻す契機になると考えた。ドイツ体操連盟の理事の多くは、参加者たちを満足させるために、階級間交流を避けることに腐心するようになり、1870年代の急速な参加者の増加に際しては、「市民階級のクラブ」、「中産階級のクラブ」、「労働者階級のクラブ」を分離させ、「知識人クラブ」、「公務員クラブ」、「商人と自営業者のためのクラブ」、「成人男性クラブ」が設立されている。参加者の増加は、新しいクラブの増設だけではなく、既存のクラブの分割をも帰結させたのである。「親称 Du」や「兄弟」という呼び名は放棄され、体操服は外国人や市民権のないものには着用が認められなかった。1891年に、ゲッツは、トゥルネンにおける「社交の改革」を主張し、賞をかけた競技会の開催に反対している。品位の維持のために、競技は体操祭の場合にのみ制限されるべきだと主張されたのである[75]。その後、賞をかけた競争のための演技会の規模は縮小され、1907年には月桂冠と表彰状の授与が放棄されただけではなく、競技そのものが完全に消滅している[76]。イギリスのスポーツにおいて拡大された階級間の交流と市民運動は、20世紀の始め、トゥルネンでは完全に放棄されてしまった。フェラインは年齢別、階級別に構成され、規約の決定に関する選挙権にも制限が設けられ、特権の増加を要求する教養知識人たちは他の階級の人々と離れて行進するなど、旧体制を想起させる組織原理が導入された。個人主義的な競争は完全に過去のものとなり、「組」や「班」は体操技術の優劣ではなく、職業、地位、階級によって決定され、測定可能な得点や記録は意味をなさなくなった。この個人主

義的な競争の衰退を契機に、19世紀末頃にはトゥルネンの「退屈さ」が批判されるようになり[77]、トゥルネンの統合力はその限界を露呈させ始める。こうしたトゥルネンの危機的な状況は、イギリスのスポーツがトゥルネンへの対抗文化として定着し始めるとき、ようやく革新の方向へとむかうことになるのである。

4．おわりに

18世紀のドイツにおいて、汎愛派はルソーの教育思想に学びながら、ギムナスティークを汎愛学校に位置づけるために、そのプログラム化を推進した。汎愛派にとって身体は「私」に従属するものであり、その前提のもとに「ドイツ人の貧弱な身体」に対して「原始ゲルマン人の自然な身体」が、「貴族階級の身体（宮廷内の振る舞い)」に対して「市民階級の身体（軍曹の振る舞い)」が、理想の身体イメージとして描かれた。汎愛派は「私」が自由にしえる身体の存在を前提としながら、「原始ゲルマン」と「市民階級」の身体を「理想的な身体」とみなすことで、「私の身体」を「理想的な身体」へと統合しようとしたのである。

19世紀には、汎愛学校で展開されたギムナスティークに対して、広く国民を対象とするプログラムを求める動きが現れる。ヤーンは、その方法をギムナスティークに学びながらも、外国語の名称を避け、トゥルネンという名称を採用し、祖国解放と祖国統一、愛国心と強健な身体の育成を目標に掲げ、自主と平等を重視し、学習論、体操服などを創出し、郊外に生徒たちを引率し、広く大衆を集わせる演技会と体操祭を開催した。ところが、1815年のウィーン会議で反動体制が確立されると、進歩主義的な理念を包摂するヤーンのトゥルネンは禁止され、シュピースの管理主義的で軍国主義的なトゥルネンが制度的な位置づけを確保する。シュピースは遊戯的活動を全面的に排した集団行動と徒手体操を重視し、教材の段階的配列や評価基準などを明示するプログラム化を推進しながら、必修教科としての学校体育を確立させたのである。

だが、シュピースの管理主義的で軍国主義的なトゥルネンだけが規律・訓練的であったというわけではない。確かに、ヤーンのトゥルネンには進歩主義的な理念が内包されていた。それでもカリスマ指導者としてのヤーンは、原始ゲルマンと古代ギリシア・ローマに彩られた体操服や記念碑といったシンボルを操作し、国歌と賛美歌を合唱し、原始ゲルマン人と古代ギリシア・ローマ人の身体を理想的な身体イメージとして描きながら、自由意志のもとにある「大衆」を「国民」に統合した。「ハーゼンハイデに宙返りを見学に行ったとき、実際には国民的祝祭へ参詣していた」[78] のであり、トゥルネンは「あるときは原始ゲルマンの、あるときは古代ギリシアの幻想に包まれながら」[79] 急激に成長したのである。シュピースのトゥルネンがむき出しの強制力による「外的規律化」のプログラムであったとすれば、ヤーンのトゥルネンは、自主的に規律を守る「自己規律化（自発的服従)」のプログラムであり、そのプログラムによって「私の身体」を「国民の身体」へと統合し、「大衆の国民化」に成功したのである。

トゥルネンにおける身体をめぐる権力作用を以上のように概観するならば、「上から／下から」「伝統／近代」「保守／進歩」「個人／社会」という二項対立的なベクトルが錯綜する「身体」の存在をうかがうことになる。トゥルネンは「上から」一方的に形成されたのでも、「下から」の純粋な運動として形成されたのでもない。トゥルネンにおいては「近代」的な新しい「伝統」が創出され、「進歩」的な側面が「保守」に貢献し、「個人」と「社会」が身体に折り重ねられてきた。

トゥルネンにみられる身体をめぐる権力作用が、トゥルネンの統合力の低下とスポーツの隆盛を背景とする「トゥルネン＝スポーツ」抗争のもとで如何なる連続性と変容を被ることになるのか。その検討が今後の課題となることを確認して、ひとまずの結びとしたい。

※本稿は平成18年度科研若手研究（B）課題番号18700502の研究成果の一部である。

注及び文献

1) ギムナスティーク (Gymnastik) の直訳は「体操」である。しかし、当時のギムナスティークは、体操よりも広い概念でもちいられていた。また、当時すでに「体育 (Körpererziehung/ Leibeserziehung/ physische Erziehung)」などの用語も使用されており、一義的に名称を規定することはできない。しかし、当時の体育的活動の中心がギムナスティークであったことに違いはない。

2) トゥルネン（Turnen）の直訳は「ドイツ体操」である。しかし、ギムナスティークと同様、トゥルネンも、より広い概念でもちいられていた。

3) 国家の統一が遅れたドイツにおいては、領邦諸国によって多様な名称が使用されていたため、それらを統一的に把握するのは困難である。また、トゥルネンから体育への移行期には、「トゥルネンの遊戯（Turnspiele）」や「青少年遊戯（Jügendspiele）」などの用語も使用されている。ここに示された変遷は、あくまでも、その趨勢を図式化したものに過ぎない。

4) 佐藤臣彦（1993）身体教育を哲学する．北樹出版．p.51.

5) 楠戸一彦（1998）ドイツ中世後期のスポーツ．不昧堂．pp.72-99.

6) 成田十次郎（1997）近代ドイツ・スポーツ史Ⅰ学校・社会体育の成立過程．不昧堂．pp.41-42.

7) 成田（1997），p.9.

8) Eisenberg,C（1999）Englisch Sports und Deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800-1939. Ferdinand Schöningh Verlag. Paderborn, München, Wien, Zürich. S.81-95.

9) Eisenberg,C（1999），S.87.

10) Eisenberg,C（1999），S.95.

11) 成田（1977），p.60.

12) Basedow,J.B（1777）Praktische Philosophie für alle Stände. 2.Aufl, 2.Teil. Crusius Verlag. Dessau. S.103.

13) 成田（1977），p.78.

14) 成田（1977），pp.119-121.

15) 成田（1977），p.113.

16) ヨハン・グーツムーツ：成田十次郎訳（1979）青少年の体育．明治図書．p.26. GutsMuths, J. C. F（1793）Gymnastik für die Jugend. Quellenbücher der Leibesübungen. Bd.1. Wilhelm Limpert Verlag. Dresden. S.10.

17) 成田（1977），p.139.

18) 成田（1977），p.21.

19) ジャン・ジャック・ルソー：樋口謹一訳（1980）ルソー全集第６巻 エミール．白水社．p.88.

20) オイゲン・ケーニヒ：山本徳郎訳（1997）身体－知－力．不昧堂．pp.97-98.

21) 成田（1977），p.233.

22) 成田（1977），p.149.

23) グーツムーツ（1979），p.35. GutsMuths, J. C. F（1793），S.23.

24) 成田（1977），p.233.

25) ケーニヒ（1997），p.105.

26) グーツムーツ（1979），p.178. GutsMuths, J. C. F（1793），S.325.

27) Gebauer,G（1988）Auf der Suche nach der verlorenen Natur. in:Körper- und Einbildungskraft. Dietrich Reimer Verlag. Berlin. S.169. ルソー：原好男訳（1978）ルソー全集第４巻人間不平等起源論. 白水社．p.191.

28) グーツムーツ（1979），p.22（抜粋）. GutsMuths, J. C. F（1793），S.3-4（抜粋）.

29) グーツムーツ（1979），p.24. GutsMuths, J. C. F（1793），S.5.

30) グーツムーツ（1979），p.33（抜粋）. GutsMuths, J. C. F（1793），S.20（抜粋）.

31) 成田（1977），p.101.

32) 成田（1977），p.104.

33) 成田（1977），p.103.

34) グーツムーツ（1979），p.22（抜粋）. GutsMuths, J. C. F（1793），S.11-12（抜粋）.

35) Eisenberg,C（1999），S.98-99.

36) 城丸章夫（1962）近代教育における身体観．大田堯編．現代教育学14．岩波書店．p.28.

37) 汎愛派の「身体」概念には、現代の視点から再検討されるべき内容が含まれていることにも注意が必要である。例えば、ゲバウァは、学校体育論にみられる「自然イデオロギー」の始原に汎愛派のギムナスティークを位置づけながらも（Gebauer,G（1988）, S.167-180）、汎愛派の「身体」概念には「人間の認知能力の基盤」という捉え方が含まれていたことを指摘している（Gebauer,G：樋口聡訳（2004）Sport Science in Germany:History and Outlook. 体育原理研究．30号．pp.94-99）。また、汎愛派がギムナスティークの理論を形成した段階では、まだ近代的な学校制度は成立しておらず、そこには近代的な学校体育とは異なる道が選択される歴史的可能性が残されていたと言える。今後の検討課題としておきたい。

38) 成田（1977），p.306.

39) 成田（1977），p.308.

40) 成田（1977），p.21.

41) Jahn,F.L（1810）Deutsches Volkstum. in:Euler,C（hrsg.）（1884）Friedrich Ludwig Jahns Werke. Bd.1. Rud Lion Verlag. Hof. S.107-108.

42) 成田（1977），pp.366-367.

43) 成田（1977），p.367.

44) Steins,G（1986）Wo das Turnen erfunden wurde...Fridrich Ludwig Jahn und die 175 jährige Geschichte der Hasenheide. Presse- u. Infomationsamt Berlin. S.42.

45) Düding,D（1984）Organisierter gesellschaftlicher Nationalismus in Deutschland /（1808－1847）. Oldenbourg Verlag. München. S.56.

46) Jahn,F.L（1816）Die Deutsche Turnkunst zur Einrichtung der Turnplätze. in:Euler, C（Hrsg.）（1885）Friedrich

Ludwig Jahns Werke. Bd.2-1. Rud Lion Verlag. Hof. S.1. 成田（1977），pp.370.

47) 実践者のなかから選ばれる指導者のこと。

48) 成田（1977），pp.367-368.

49) Jahn,F.L（1810），S.234. 成田（1977），pp. 318-319.

50) 例えば、アイゼンベルクは、グーツムーツのギムナスティークが「個人主義」であるのに対して、ヤーンのトゥルネンは「集団主義」であると規定している。Eisenberg, C（1999），p.113.

51) 成田十次郎（1970）体育はこれでよいのか. 清水重勇他著. 私たちと近代体育. 福村出版. pp.113-114.

52) 成田（1970），p.102.

53) 成田（1970），p.102.

54) Iselin,F（1893）Über das Männerturnen. Gasch,R(Hrsg.). Das Gesamte Turnwesen. Rud Lion Verlag. Hof. S.226-231.

55) Hueppe,F（1895）Ueber die Körperübungen in Schule und Volk und ihren Werth für die militärischen Uebungen. Hirschwald Verlag. Berlin. S.32. Schmitdt, F.A（1926）Die körperliche Erziehung und die Leibesübungen in der Geschichte der Hygiene. Bogeng, G.A.E（Hrsg.）Geschichte des Sports aller Völker und Zeiten. Bd1. Seemann Verlag. Leipzig. S.104.

56) 成田（1970），p.115.

57) 成田（1970），pp.99-102.

58) 成田（1970），p.102.

59) 成田（1970），p.116.

60) ジョージ・モッセ：佐藤卓己・佐藤八寿子訳（1994）大衆の国民化. 柏書房. p.137.

61) モッセ（1994），p.94.

62) Eisenberg, C（1970），pp.107-108.

63) クリスチャーネ・アイゼンベルグ：市井吉興・有賀郁敏訳（2001）フリードリッヒ・ルートヴィヒ・ヤーン―トゥルネンの「考案者」. 立命館産業社会論集. 37-1号. pp.159-160.

64) モッセ（1994），p.157.

65) モッセ（1994），p.87.

66) モッセ（1994），p.51.

67) モッセ（1994），p.87.

68) Jahn,F.L（1810），S.316. 成田（1977），p.330.

69) 1892年には労働者体操協会が伝統的な体操協会の「権力への迎合」に対抗して組織されるが、労働者体操協会も、歴史意識にもとづく国民的祝祭への祝祭を奨励した（モッセ（1994），pp.169-189）。

70) この大衆運動は、ヤーンのトゥルネンにみられた遊戯を復興させることで、シュピースのトゥルネンを改革しようとした「遊戯運動」とも結びつき、スポーツを部分的に取り込みながら展開されることになる。この点に関しては稿を改めて詳述したい。

71) Eisenberg,C（1999），S.128-129.

72) Eisenberg,C（1999），S.131-132.

73) Meyer,W（1903）Ueber die Stellung der deutschen Turnerei. in:Preußsische Jahrbücher. S.136.

74) Möller,K（1909）Die Kultur in den Turnvereinen. Dürer-Bund. Flugschrift zur ästhetischen Kultur. Callwey Verlag. München. S.59.

75) Goetz,F（1891）Vom rechten Turnerleben. Strauch Verlag. Leipzig. S.23-24.

76) Karle,E（1930）Aus der Bundesgeschichte. Das Wett- und Preisturnen. in: Bundesschul-Nachrichten des Arbeiter- Turn- und Sportbundes 12. Arbeiter-Turnverlag. Leipzig. Nr.11. S.43.

77) Baumgartner,H（1893）Ein Wort zur Sache. in: R.Gasch（Hrsg.）Das Gesamte Turnwesen. Ein Lesenbuch für deutsche Turner. Bd3. Rud Lion Verlag. Hof. S.245.

78) モッセ（1944），p.136.

79) 三浦雅士（1994）身体の零度. 講談社選書メチエ. p.220.

（2007. 7 .31受理）